

金城学院大学 キリスト教文化研究所 公開研究発表会

金城学院大学 キリスト教文化研究所は、今年で設立25年となります。

今年度は、下記のように研究発表会を開催いたします。

多数の方々のご参加をお待ちしております。

日時

2月20日(土)

13時30分～16時00分

ZOOMウェビナー形式

(参加者の顔と名前は表示されません。)

(参加無料・要申込)

研究発表

インドへの「パッセージ」

— E. M. フォースターは神と罪と罰をどう捉えるか —

ドライデン いづみ (本研究所客員研究所員)

シンポジウム

「再洗礼派フッタライトと後期近代」

フッタライトの近代性と反近代性

丹羽 卓 (本研究所教授)

フッタライトにおける学校教育の受容と抵抗

鵜海 未祐子 (駿河台大学スポーツ科学部／現代文化学部講師)

カナダにおける再洗礼派の信教の自由 — 宗教制度主義と法多元主義の観点から

山本 健人 (大阪経済法科大学法学部助教)

◆参加申込方法

参加をご希望の方は、下記URLよりお申し込みをお願いいたします。

参加URL及び資料をメールにてお送りいたします。(締め切り：2月12日(金)正午)

<https://forms.gle/Mmd4JYXuLD5r7Ba46>



強く、優しく。



金城学院大学

主催 金城学院大学 キリスト教文化研究所

名古屋市守山区大森2-1723

Tel 052-798-0180

Email ccoffice@kinjo-u.ac.jp

発表概要



ドライデン いづみ (本研究所客員研究所員)

英国の作家E. M. フォースターは、1910年の時点で小説家として成功した後、14年の休止期間を経て1924年に小説『インドへの道』を出版するに至った。しかし、『インドへの道』が絶賛を博したにも関わらず、フォースター自身は「芸術的失敗作」と見做し、以降、生涯小説を出版することがなかったのは何故か。本発表では、調査研究資料としてフォースターの手紙や手書き原稿を元に、フォースターの『インドへの道』に対する疑念の原因を探るとともに、研究資料から明らかになったロシア人小説家ドストエフスキーの音楽的及び宗教的影響を救済策として考察する。また、ドストエフスキーの作品は、フォースターのオペラ『ピリー・バッド』、死後出版の『アーケティック・サマー』と『モーリス』を執筆継続する上で重要な役割を担ったと結論付けたい。



丹羽 卓 (本研究所教授)

16世紀の宗教改革の中で生まれた再洗礼諸派の中でもフッタライトは最もラディカルな姿勢を保持し、500年を経てなお世俗社会と分離したコロニーでの生活を維持し続けている。その一方で、信仰を脅かす危険性の低い現代技術を積極的に取り入れ、コロニーの発展に役立っている。彼らが堅持するキリスト教共同体の価値観は近代的価値観と時に激しく衝突するが、驚くほど現代を先取りしているように見える点もある。フッタライトが後期近代社会とどう折り合いをつけ、その独自性を維持し続けているのかを探り、その価値観を見直すことで、後期近代社会に生きる現代人が直面している課題のいくつか（ジェンダー、性的少数者、個人の自由と社会規範など）について考察したい。



鵜海 未祐子 (駿河台大学スポーツ科学部／現代文化学部講師)

本発表は、多文化主義カナダにおける宗教マイノリティのうちフッタライトに焦点を当てて、その宗教的共同体が、州の教育行政との間でどのように学校教育を受容／抵抗してきているのか分析と検討を進めるものである。フッタライトの学校教育をめぐる攻防の歴史をひも解くなかで、フッタライトの教育が、世俗的な教育もしくは他の宗教マイノリティの教育と、どのような異同をもつと特徴づけることができるのか明かになるだろう。その際には、ひろく宗教マイノリティの学校教育をめぐる、永続的な周知の争点である信教の自由や教育権や学習権の間で生じる葛藤の問いに、どのような調整への示唆を得ることができるのか考察を深めることとしたい。



山本 健人 (大阪経済法科大学法学部助教)

本発表では、カナダにおける再洗礼派の特異な宗教的実践・生活様式と国家法秩序との抵触関係を検討する。この関係を検討するにあたって、本論文では法多元主義と宗教制度主義の観点を補助線として引く。法多元主義は、「法」を国家法にのみ限定するのではなく、非国家法をも「法」と認識する立場であり、宗教制度主義は、個人主義を前提にする近代リベラリズムに基づく信教の自由理解が、信者の実際の生活を説明するのに不十分であることを指摘し、宗教制度・組織の側面から信教の自由理解を補足するべきだ、という立場である。この二つの立場から検討することで、再洗礼派の宗教実践と国家法との関係をより深く理解できるように思われる。また、宗教的多様性が顕在化・混在化する社会における共生モデルの一つを示すことができるように思われる。